ソースタイン・ヴェブレンの歴史哲学

小　原　敬　士

1

デヴィッド・リースマンは，ヴェブレンにかんする鋭い洞察にみちた書物のなかで，かれの歴史観の核心を見事にとらえてこうかいている。〈ヴェブレンは，歴史を，人間が製作本能を通じてついに余剰の富をつくり出した過程とみた。この余剰の富がはじめて人間に地上における適度の生活保証を与えたのであるが，しかし，この同じ余剰は，エデンのりんごのように，一群の新らしい利己的な動機を生み出すことを可能ならしめた。見栄(emulation)ということがはいってきた。ひとびとは，他のものを犠牲としての上下の差別のなかに快楽を見出した。ヴェブレンの見解によれば，生産と消費の原始的均衡は，つぎのような世界に席をゆずる。それは，かれの時代においては，一方はドイツや日本のような国と，他方はイギリスやアメリカのような国からなり立っている世界である。前者においては，《過度》の生産力が，軍事的余剰を好戦的な君主の手に握らせているし，後者においては，《過度》の消費が，社会のあらゆる階級をまきこんで，見栄のための余計なものの無意味な追求に走らせる。いずれのばあいでも，かれがしばしば指摘するように，庶民がその費用を払う。〉(David Riesman, *Thorstien Veblen. A Critical Interpretation*,1953, p. 57–58.)

ここにはっきりと捉えられているように，ヴェブレンの歴史観，いなかれの全思想体系を通じて貫かれている基本観念は，製作本能(instinct of workmanship)と金銭的な見栄(pecuniary emulation)，生産者と販売者，産業と企業といったような二元論的概念対であった。かれは，そのような二元論を基礎として，まず最初に見栄の社会学としての『有閑階級の理論』(*The Theory of Leisure Class*. 1899.)を，つぎに，営利活動の経済学としての『営利企業の理論』(*The Theory of Business Enterprise*. 1904.)をかき，さらに3番目に人間社会の歴史学としての『製作本能論』(*The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, 1914.)を著わした。

そのばあい，人類の生活史についてのヴェブレンの根本的な立場はそのような歴史過程を絶えざる〈進化〉の過程とみるダーウィン主義的な立場であった。かれは，経済学の分野では，古典経済を〈前ダーウィン的分類学〉(pre-Darwinian taxonomy)として批判し，自己の経済学を〈進化論的経済学〉とよんだが，このばあいのダーウィン的，進化論的ということは，事物をつねに不断の流動の中にみ，原因と結果との機械的累積過程を追求しようとする態度を意味した。これに反して，前ダーウィン的思惟においては，その主要関心は，因果関係ではなく，事物の自然的かつ不変的な関係であり，自己完了性であると考えられた。

ヴェブレンによれば，例えばアダム・スミスのばあいには，事物は結局，〈自然〉〈正常〉の状態に収斂するという目的論的思想が支配しており，したがって経済生活の歴史過程は，そのような仮想的自然的な生活目的に指向する秩序ある過程と考えられた。そのような過程は，ほんとの歴史ではなくて，ジェイムス・スチュアートのいわゆる〈臆測的歴史〉("conjectural history")となる。

〈このようなデータの正常化の結果は，一方においては，過去の経済生活の様相をとり扱うばあいに，ジェイムス・スチュアートが《臆測的歴史》とよぶものを用いることとなり，他方においては，今日の現象を無解釈の観察を基準としてではなく，むしろ神の与えた生活目的に合致するものを基準として記述することとなる。表面的には因果系列を基準として事実(想像上もしくは観察上の事実)が語られるけれども，しかし窮極の因果系列は，目的論的適合性に沿

って動くものと解される。〉(T. Veblen, *The Place of Science in Modern Civilization*, 1919, p. 123.)

これに比べると，マルクス主義経済学においては，経済事象の，史的唯物論を基礎とする歴史的把握が重要視されているが，しかしヴェブレンのばあいには，マルクスの弁証法的発展の理論もまたやはりひとつの前ダーウィン的，目的論的思考様式にほかならないと考えられる。

〈進化論的——ダーウィン的といってもよい——な立場は，まったく非人間的なものであるけれども，新ヘーゲル的，浪漫主義的，マルクス主義的な立場は，まったく人間的なものである。……事実は，知性的で公正な精神をもつひとびとの理性に訴えることによって確定することができるような進路をとるものと解釈された。……浪漫主義的(マルクス主義的)な理論系列は，もともと知性的な系列である。したがってそれは目的論的なものである。その論理的帰趨は，論議によってつくり出すことができる。つまりそれは，ひとつの目標にむかう。これに反してダーウィン的思考様式においては，事実のなかに追求せられ，事実に帰属すると考えられる連続性は，因果の連続性である。その継起は，生命のない因果関係の背後の力(vis a tergo)だけによって左右されるのであり，本質的に機械的なものである。新ヘーゲル主義的，マルクス主義的発展様式は，闘争をおこなう覇気ある人間精神のイメージによって描かれている。ダーウィン的進化の様式は，機械過程の性質をもつ。〉(*ibid.*, p. 436–7.)

さらにヴェブレンは，ドイツ歴史学派の歴史主義にたいしても批判的であった。かれは，後期歴史学派に属するシュモラー(Gustav Schmoller)の経済学にたいして，その方法がダーウィン以後的であることをみとめながら，シュモラーがそのすぐれた歴史研究の帰結のなかに，しばしば社会政策的，社会改良主義的価値判断を導入していることに，つよい不満をあらわしているのである。

〈……かれ〔シュモラー〕は，心理学的訓練，文化発達の因果的役割にかんするひろい知識，科学的立場をとりうる能力といったような点で，必要な資格をそなえている。それにもかかわらずかれは，再び伝統的な歴史主義(Historismus)の退窟な訓戒の無駄骨折にかえってゆく。〉(*ibid.*, p. 275.)

ヴェブレンの理解するところによると，ダーウィン以前の分類学においては，あらゆる科学的探求に当っての興味の中心は，因果法則のもとにある諸現象を支配する自然法の体系であった。このような自然法は因果のゲイムの法則の性質をもっていた。それは，事物のあいだに自然に成立する関係であり，過渡的な活動の途中にふくまれる諸原因の要素の秩序正しい展開であり，また原因から結果への推移が完了したばあいにおこってくる安定した関係であった。そこでは，力点はつねに過程にではなく，自己完了の状態におかれた。

これに反してダーウィン以後の科学の特徴は，重点のおきどころが変り，因果過程なり，原因と結果とのあいだの不安定性や推転の期間なりが探求の中心となるということである。そのような観点の変化は突如としてあらわれたものではない。しかしながら，それは後にはずっと先まですすみ，その結果，近代科学は継起的変化の過程の理論となりつつある。そして，このような変化は，累積的因果関係の結果であり，自己継続的もしくは自己繁殖的なものであって，なんら窮極の到達点をもつものではないと考えられる。

2

かくしてヴェブレンにとってもっとも重要な問題は，人類の文化や制度がいかにして発生し発展し，衰退したかの累積的因果過程を追究することであるが，そのような歴史的推移を制約する基本的な力はつぎの2つのものであると考えられる。

そのひとつは，本来的に不変な人間性の持続的な諸性向——かれのいわゆる人間〈本能〉であり，もうひとつは，そのなかで産業技術の変化が制度的変革の主要な営力となるような物質的環境である。つまり人間の生活史は，人間の生得的な性癖ないしは本能(instinct)が基礎となり，それに外部的環境の制約が加わって，無限の自己発展的な累積的因果系列となって，不断の発展をとげるものと考えられる。したがってヴェブレンのばあい

においては，歴史の創造力としての人間性は，あくまで作為的，目的的な行動をいとなむ積極的な営力として理解されており，単に外界の刺激にたいして習性的な反応を示す消極的な性質のものではない。この点でヴェブレンは，古典学派もしくは功利主義における，快楽と苦痛との快楽主義的計量器(hedonistic calculus)としての経済人(homo economicus)の概念をきびしく排撃するのである。

さらにヴェブレンは，このような歴史発展の原動力としての人間性は，その基本的要素としてつぎのような性癖や性向をふくむものと考えている。人間性には，つぎのような2つの大きな部類* がある。そのひとつは，集団本位の内攻的な性癖(group-regarding prudential proclivities)であり，もうひとつは自己本位の略奪的性癖(self-regarding predatory proclivities)である。そして前の部類にはさらに，(1) 親性本能(parental bent)，(2) 製作本能(instinct of workmanship)および (3) 好奇本能(instinct of idle curiosity)の3つの主要本能がふくまれ，後の部類のなかには，見栄，武勇，支配，威信といったような性癖を数えることができる。

親性本能というのは〈来るべき世代の福祉にたいする非利己的な配慮〉(T. Veblen, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, 1914, p. 46.)であり，製作本能というのは〈効果的な仕事にたいする偏好と，無駄な努力にたいする嫌忌〉もしくは〈実際的な方便，手段方法，効率と経済の考案，熟練，創造的な仕事，事実の技術的支配にたいする関心〉(*ibid.*, p. 33.)である。また好奇本能というのは，〈よりいっそう重大な利害がかれの注意をひかないばあいに，ひとびとが，多かれ少なかれ，事実をよく知ろうと欲する〉本能である。(*ibid.*, p. 85.) そして〈人間の好奇心は，その習慣的な行使には，なんらの功利的な目的もはいっていないという意味において，疑いもなく《無用(idie)》な性癖であるが，しかしこの方法によって主体の利用しうる知識のなかにひき入れられる物質的知識は，やはり製作精神の目的に役立つかもしれない〉(*ibid.*, p. 88.)と考えられる。これらの性癖ないしは本能は，いずれも集団本位の非利己的な本能であり，また勤労的生産的な性癖であるが，そのうちのもっとも主要であり，代表的なものは，製作本能である。〈その種族の物質的福祉にたいして，したがってまた，その生物学的成功にたいして直接に役立つそれらの本能的気質のうちで，主要なものはおそらく，ここに製作感覚として語っている本能的性向であろう〉とヴェブレンはいう。(*ibid.*, p. 25.)

一方，人間は，すぐれた武勇，豊かな富財，衒示的な消費，名誉ある地位などによって自己の能力を示し，他のものを威圧し支配しようとする自己本位の外攻的な本能をもっているのであり，そのような本能もまた，前の集団本位の内攻的本能と矛盾と対立の関係に立ちながら，やはり人間や文化の進化の推進力として働いていると考えられる。このばあい，集団本位の諸本能と，自己本位の諸本能とは，それぞれのカテゴリーのなかでは，互いに相互補強の作用をとり交すが，カテゴリーがちがうばあいには，互いに反撥し，他のものを抑制する。ことに自己本位の本能が優越するばあいには，製作本能その他の集団本位の本能はしばしば抑制され〈汚染〉(contaminate)される。

〈なんらかの理由によって，厳格な階級差別，恣意的な政府統制，おそるべき神，権威的な聖職者などをともなう明白な強制的略奪的性格の文化をもつ人民は，これらの制度の要求や論理に適応するようにつくられた産業組織や産業技能をもつようになるであろう。そのような制度的状況は，製作本能が効果を発揮するような技術的構造にたいして，大きな，そして広範な抑制を与える。〉(*ibid.*, p. 41.)

3

人類社会の発展過程を，基本的に，製作本能と金銭的見栄との対立と交替の過程と考えるヴェブ

---

* 人間性の諸要素にかんするヴェブレンの思想は，かれと同時代の学者である William James, John Dewey, Jacques Loeb, W. McDougall などによって影響をうけているようにおもわれる。人間性の2つの大きな部類については，Myron Watkins, "Veblen's View of Cultural Evolution," Douglas F. Doud, ed., *Thorstein Veblen. A Critical Appraisal*. 1958. の示唆によるところが多い。

レンにとっては，その歴史過程は，ごくおおまかにいって，つぎのような2つの大きな段階に分けて考えられる。そのひとつは平和な原始未開文化(primitive, savageous culture)の段階であり，もうひとつは，それにつづく略奪的な野蛮文化(barbarian culture)の時代である。そして，この後者のなかにさらに古代の遊牧文化，中世封建制，近代の手工業，営利企業，機械制産業の諸段階が区分される。

まず最初に低い原始末開の社会がくる。そこでは，農耕と家畜飼育とを基礎とし，親性本能と製作本能とが優越する平和な母系社会の生活があった。〈農耕と家畜飼育の端緒がみられ，集団の公共利益ということがなお，ひとびとの熱意と配慮がつねにそれにむかっている主要な日常の関心事であったような文化の初期の段階においては，母性がつねに人間的事物の秩序の中心的事実であった。したがってこのような文化の段階においては，親性本能と製作本能とは両々相まって，女性を，技術体系の主要な地位に据えるように作用したであろう。〉(*ibid.*, p. 94.)

このような社会においては，集団本位の生産的創造的な人間本能がつよく支配していたのであって，自己本位の所有や支配の本能はまだ十分に前面にあらわれていなかった。だからそれは平和愛好的(peaceable)な社会であった，とヴェブレンはいう。未開社会は〈万人にたいする万人の戦い〉のホッブス的状態であったという古くからの仮説は，かれのばあいには，誤りとして排撃される。

〈北部ヨーロッパでもエーゲ海でも，ヨーロッパの新石器文化を，そのように〔好戦的なものとして〕特徴づけることは，少しも考古学的証拠の際立った支持をうけない。……両者からの資料は，道具に比べて武器の点できわめて貧弱である。……事実上，武器をもっておらず，その神は母なる神であり，その宗教儀式は農作の儀式であるような文化は，恐怖と蛮勇の文化であることはできない。〉(*ibid.*, p. 125–126.)

このような未開文化は，その後においても，より高次の文化に発展することなしに，原始そのままの姿で停滞状態をつづけるばあいもないわけではない。エスキモーやプエブロ・インディアンのばあいがそれである。しかしながら，社会進化の正常な進路としては，末開社会の諸制度は，財産権の発生とともに，しだいに衰退，消滅し，つぎの略奪的な野蛮社会に席をゆずる。そして，平和な未開社会の中から財産権が発生する径路は，およそつぎのようなものであると考えられる。

(1) 古代の勤労者が，効率，勤勉，偶然の利得などによって，日常の消費以上の富を生産し蓄積すること。(2) 未開社会における魔術師(shaman)，聖職者などの手中に富と権力が集まること。(3) 製作本能によって富の蓄積がすすむとともに攻撃や略奪の誘因がおこり，その結果として〈戦争の首長〉の手に権威と金銭的利得が獲得されること。

財産権はもともと製作本能と産業技能の結果であるが，しかし，いったんそのような制度ができ上ると，こんどはその中から，生産的肉体労働の蔑視，製作本能の後退ということがおこり，またそれに代って金銭的見栄，名誉，威信といったような自己本位の外攻的略奪的性癖の高揚ということがはじまる。このようにして人類社会は未開文化から野蛮文化の状態へと推移する。そのような社会はもはや平和な母系社会ではなくて，家父長的独裁的指導者のもとでの戦闘的な組織となる。

〈その社会は，必然的に，つぎのような諸制度をともなう家父長的体制となる。個人の手中への富のいちじるしい集中，多くのばあい動産奴隷と農奴をともなう富や社会的地位の大きな不均衡，市民的，政治的，宗教的目的にも役立つような家父長的，独裁的指導者のもとでの戦闘組織，女子供のある程度の服従と，普通，家父長的な上級支配階級にとっての一夫多妻制をともなう同じ型の家族制度，一神論ないしは君主制の性質をもち，家父長的独裁制の線に沿う宗教制度などがそれである。……そのような文化は，明らかに，はっきりした略奪的な事業の点でも比較的平和な，金銭的な事業の点でも成功を収めるのに適している。〉(*ibid.*, p. 165–166.)

そのような社会においては，製作本能にもとづく生産労働は賤労として卑められ，財貨の浪費を

ともなう閑暇が優越の烙印として尊重される。そこでは〈富の所有は，その所有者を生産労働から免除する。そのような免除は富の烙印であり，したがって，なにものをももたず，それゆえに働かねばならぬひとにたいする優越の烙印となる。それゆえに，労働への献身は，劣等と不名誉の烙印となる。〉〈富は，ふんだんな財貨消費の手段となるから，財貨の衒示的消費は，金銭的優越性の烙印となり，したがってあらゆる金銭的文化の尊貴の要素となる。〉(*ibid.*, p. 174.)

このような略奪的文化の特徴をもっとも典型的にもっていたのは，アッシリア，バビロニア，メード，ペルシァ，ヒンドゥ，ヒクソス，イスラエル，フェニキアなどの東洋の遊牧民族であり，またフン，モンゴール，タタール，アラブ，トルコなども，ほぼそれに近い状態を示していた。しかし西欧文明は，ある程度の略奪的金銭的特徴をもっていたにはちがいないが，しかしそれはけっして東洋的独裁制の標準には達していなかった。西欧文明は，それほど好戦的でなく，むしろかなり平和的であった，とヴェブレンはいう。〈少なくとも暗黒時代の終末以後，この文明を，金銭的文化のはっきりした略奪的段階から区別する明確な特徴は，この文明において指導力をもった国民が絶えずそれに立ち帰ったところの平和的技術の根づよい追求ということであった。〉(*ibid.*,p. 171.)

つまりヴェブレンのばあいには，近代文明とその全歴史は，製作本能が優越していた末開文化とはちょうど対照的な略奪的金銭文化の中に位置していたことは間違いないとしても，しかしそれは，初期の野蛮時代のような典型的な略奪段階に属していたのではなく，むしろいっそう高次の第2次的平和段階に属していたと考えられる。ことにほぼ13世紀以後のヨーロッパにおいて，経済生活の商業化がすすみ，手工業制度が発達すると，かつては劣等と不名誉の象徴であった勤労と製作本能は再びかつての名誉ある地位を回復した。

〈固有の意味の略奪段階が結局，同じ金銭文化の商業的段階に席をゆずるに至った西欧においては，この点における事態の一般的動向は，略奪的(強制的)準則がつねに支配しているかぎり，知識，技術および製作者気質の衰退であったけれども，しかしそれは間もなく，技術的効率や科学的見方の，緩慢な回復と進歩をもたらした。それは，このような文化の商業化の進行とほぼ比例しており，したがってまた，一般的にいえば，宗教的畏怖の衰退とむすびついていた。〉(*ibid.*, p. 181.)

そして，この段階において再びよみがえった製作本能の負担者は，手工業もしくは小企業(small trade)に従事する中産階級であった。もともと金銭文化においては，上流，中産および下層の3つの階級の分化がみられる。上流階級は富の所有者であって，そのために勤労的な生産活動から免除される〈有閑階級〉である。下層階級は本来の製作本能の保持者であって，有用な生産労働に従う。その中間の中産階級は，ある程度の富の所有者であるけれども，また同時にある程度の勤労精神の保持者でもある。これらの上，中，下の諸階級は，いわば略取(predation)と営利(business)と産業(industry)をそれぞれ体現する。

西欧文明における近代的な商業，産業および技術体系の発展は，手工業と中小企業に従事するこれらの中産的勤労階級によっておしすすめられた。そこに未開文化において特徴的であった製作本能の復活と再現がおこってくる。

だから，〈文明とは，略奪的野蛮文化に比べて，未開の精神〔製作者精神〕にむかっての精神的復帰として特徴づけらるべきものである。〉(*ibid.*, p. 204.)〈手工業制度は，製作者精神と自助心(self help)〔利己的営利主義〕との組織的規制的な制度である。〉(p. 211)〈手工業経済のもとの日常生活の規律は，製作者精神の規律であると同時に，金銭的自助心のそれでもあった。〉(p. 211)ヴェブレンはそのようにいうのである。われわれはそこに，ヴェブレンが，おそらくゾンバルト(W. Sombart)の衣食主義(Nahrungsprinzip)と営利主義(Erwerbsprinzip)との二元論の影響のもとに，手工業ギルド制度を独特な仕方で理解していることをみるのである。

4

しかしながら，このような状況は，歴史発展の

一定の段階だけにみられたことであった。その後，経済と技術がさらに成長し，小規模商業をともなった手工業がいっそう発展して，金銭文化のさらに新しい発展段階——営利企業時代——をつくり出すようになるとともに，製作者気質(workmanship)と販売者気質(salesmanship)，産業的職業と金銭的職業とのあいだの乖離がますますはなはだしくなり，前者にたいする後者の優越がいっそう際立ってくる。

手工業ギルドとむすびついていた小規模商工業者は，取引量の増大とともにしだいに富裕となり，広範な家内工業(苦汗制度)を組織するようになる。かれらは，やがて仲買人(jobber)となり，さらに商業貴族(commercial prince)や金融業者(financier)となって，ますます固有の手工業生産から遠ざかる。かくして，財貨生産の技術過程から離れて，企業の金銭的経営だけに献身する真の意味の企業者が生み出される。

〈手工業時代の末期には，親方は，典型的なばあいは，熟練労働者の雇主であり，かれ自身の仕事場の監督である。しかし，かれらはしばしば，手工業で働くことをまったくやめてしまい，その全体の注意を，産業の営利的側面にそそいだ。これらの名目上の手工業の親方は，事実においては，仕事と肉体的な接触を保っていない単なる商売人，産業の将帥，企業者であった。〉(*ibid.*, p. 282.) 〈かくして手工業の機能の中から，技術の規模と効率の増進を通じて資本主義があらわれた。そして，このような資本主義体制によって与えられた地盤の上に，その産業の将帥と大金融業者の力によって，15，6 世紀のヨーロッパの経済的運命を左右した営利企業の時代がおこった。〉(p. 282.)

このような営利企業時代の，固有の手工業時代に比べての際立った特徴は，金銭的原理が効率の標準もしくは行動の規範として，ますます優越した地位に立ったことであった。そこでは，あらゆる技術的効率は，すべて金銭的利得を基準としてのみ評価され，製作技能はつねに販売術によって制約される。かくして製作本能は，金銭的な自己拡大の理想や，差別的な見栄の基準によって抑制され，〈汚染〉される。この点で近代の営利企業社会の文化形態は，再び古い略奪的な金銭文化の形態と多くの類似点をもつと考えられる。

〈上流社会の怠惰な生活は，ことの性質上，略奪的祖先の貴族(地主)の事柄であり，また現在の状態のもとでは，略奪的寄生的習慣の事柄である。そして実業界から引退し，《誉ある閑暇》(otium cum dignitate)の状態におちこむ現代の金持にとっては，このような半略奪的な地主や貴族の仲間にたいする多かれ少なかれ儀典的な遍入によって，それに同化せられ，復古主義に似た色彩をおびるということが，多くのばあい，かれらの運命である。〉(*ibid.*, p. 226.)

ヴェブレンは，近代的資本家階級を，例えばマックス・ウェーバーのばあいのように，勤労的，生産的な中産者層としてではなく，例えばルヨ・ブレンターノのばあいのように，あくまでも営利的金銭的な略取者として考え，したがってそれを，古代ないしは中世の有閑的な独裁者や将軍(tycoon)に類推しているのである。

このような製作精神と販売術，技術者と企業者との乖離は，営利企業の時代が産業革命を経て，機械制産業の時代にすすむとともに，いっそう歴然となった。生産過程の機械化が広範，複雑となり，また資金調達や販売の機能もますます専門化するにしたがって，企業の技術過程を担当する経営者と，金銭的管理に当る企業者とのあいだに機能分化が発生し，後者がいっそう高い指導的地位に立つことは，当然の成行であった。

〈典型的なばあい，機械制産業は手工業に比べていっそう大規模におこなわれ，製作技能と販売術とのあいだの，いっそう広範ではっきりした分業をともなう。このような近代的産業体制にふくまれる大所有制のもとでは，製作者はもはや産業的企業の金銭的経営の責任をとることはないし，またとることはできない。他方，大所有制と広範な事業関係の同じ条件が，それを管理する企業者にたいして，工場とその技術過程にたいする直接の監督権を，他のものに委譲し，そのエネルギーをもっぱら企業とその取引の金銭的経営に捧げることを要求する。この

点から，機械体制と，それにともなう高度に専門化した営利企業が，大規模かつ高度の発展に達するとともに，それを管理する企業者は，訓練と関心がますます低下するために，機械体制の技術的必要を世話をすることがますます困難となってくる。〉(*ibid.*, p. 344–345.)

〈大きな産業的企業を管理する企業者は，自分たちが技術的な事柄を指導，監督し，もしくは統制するのに適していないことを悟りはじめている。だからかれらは，自分たちに代ってその仕事をする専門家を試験的に雇い入れた。そのような専門家が俗に《能率技師》として知られているものであり，技術者と会計士の資格を綜合したものと考えられる。〉(*ibid.*, p. 345.)

このように企業者は，企業の技術過程については，その管理を専門技術者に委託するけれども，全体の金銭的取引や企画については，そのデシジョン・メイキングを自己の手中に掌握する。そして，このような固有の意味の企業者は，あらゆることを金銭的営利の基準によって判断する。かれらの眼からみれば，生産過程における産業的効率も，つねに金銭的効率に還元されるのであって，それは単に偶然的，副次的な意味で産業的効率を意味するだけである。

〈産業の進路を決定するそのような取引は，もっぱら金銭的利得を目標としておこなわれるといっても，けっして誇張ではない。——企業取引にとっては，産業上の結果なり，その社会の福祉にたいする関係なりは，偶然の事柄であるからである。平たくいえば，現在の技術と営利主義の支配のもとでは産業は，企業者によって，営利目的のために経営されるのであって，技術的専門家によって，社会の物的利益のために経営されるのではない。〉(*ibid.*, p. 351.)

このように企業がもっぱら価格を基準とする最大限利潤を目標として経営されることは，社会の物質的福祉を基準としてみたばあいに，当然に，種々の弊害や不効率を生み出すこととなるが，この点は後にヴェブレンが，『技術者と価格体制』(*The Engineers and the Price Systen*, 1921 拙訳『技術者と価格体制』未来社，1962 年)において，くわしく説いたところである。またヴェブレンのみるところによると，このような企業者，金融業者もしくは不在所有者による産業支配と利潤獲得は，ほかならぬアメリカ社会において，もっとも典型的にあらわれていると考えられるが，この点をいっそうふかく究明することは，まさにかれの最後の著作である『不在所有者制論』(*Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times: The Case of America*, (1923.) の主要課題であった。

このようにヴェブレンによれば，資本主義経済の特徴は，価格評価や金銭的販売術の優越と，その結果としての製作者精神や技術的効率の疎外であると考えられるのであるが，しかし，かれ自身はそれを是認しているわけではなかった。むしろかれは，生産技術が高い水準に達した資本主義体制のもとに，製作者精神が，金銭的評価や販売術によっていちじるしく〈汚染〉されていることを嘆き，そのような技術的効率を利潤の桎梏から解放して，人民の一般福祉に役立たせることが，現代社会の最大の課題であると主張する。

かれは，最近における機械過程の一般化と複雑化が製作本能と技術的効率の復位を現実に要求しているとみる。技術者は，いままでは特権階級のための不労所得の管理者，供給者として機能してきたが，いまや状況の力によって〈産業体制の責任ある指導者の地位にすえられ，また社会の物質的福祉の決定者となる立場におかれる。〉(『技術者と価格体制』拙訳，97 ページ)かれらはやっと階級意識をもちはじめ，自分たちこそが産業体制の不可欠の将官であることを反省しはじめた。かれはそのように考え，そしてかれは，技術者たちが〈技術者ソヴィエト(団結)〉をつくり，〈効率の意識的撤収〉〔総罷業〕をおこなうことによって，不在所有者制の軛から自己を解放し，その社会的指導力をとり戻すことを提唱した。これがヴェブレンが，ほぼ 1920 年頃に，ニュー・ヨークにおいておこなったテクノクラシー (technocracy) 運動の思想的根拠であったが，それは，製作本能と金銭的見栄との基本的二元論によって，人類文化の発展過程を理解しようとしたヴェブレンの歴史哲学の必然的な帰結であったのである。